

人 格 部 門

パーソナリティ研究の動向

塩 見 邦 雄

(兵庫教育大学)

パーソナリティ研究動向の概説

パーソナリティ研究は心理学の研究の歴史の中でもとりわけ長い歴史をもっている。しかしながら、パーソナリティ研究は、従来から心理学の研究のなかではなかなか結論の出しにくい微妙で、難しい問題を含んだ領域として研究者間では認知されている領域でもある。その理由は一人一人の全体的なパーソナリティ構造が、生誕以降の長い長い年月をかけた、いわゆる環境要因によって形成されていくものであり、しかも更に遺伝要因(遺伝子)がそれに強力に、かつ複雑に交わりあっていくものであって、そのため個々のパーソナリティの特性や構造が「単一の要因に帰結できる」ものとして抽出して取り出したり、結論づけをしたりして、示すことができないことによる。そういった問題の解決の困難さの点から言えば、この領域では、古くから論議されてきた問題が、現在も論議の中心に、依然としてあるということが多い。そして、新しいと思われる問題も、よくよく検討してみると、古い問題が形を変えて蒸し返されて論議されているということも多いようである。パーソナリティ研究の問題は実に長い長い年月を通して論議されてきて、しかもなかなか決定的な結論を持つに至らないのだといえ、この分野に興味・関心を持つ研究者に対しては悲観的に過ぎる言い方なのかもしれないが、このことはまぎれもない事実である。しかしながら、パーソナリティの問題は「人間」の持つ「心」の基本的問題としてあるのであって、研究されていく必要性は心理学の他の領域と同等に、あるいはそれ以上にあるのだと私は考える。

そして、現在の基本的なパーソナリティの研究問題としては、私は以下の4つに集約できるのではないかと考える。それらは、

1. パーソナリティを例えていえば「傘」とすると、傘をささえる骨としてのパーソナリティの次元は何か。次元として、いわゆる「Giant Three」(ここでは「巨大3次元尺度」と訳しておくこととする。)か、「Big Five」(ここでは「5大次元尺度」と訳しておく。)か、という論争について、及びそれに関わっての質問紙法的パーソナリティ検査の作成についての問題。
2. 人間の成長・発達によるパーソナリティ構造の変

化・様相についての研究。

3. パーソナリティの中の「自己」などの構造・機能・作用についての問題。
4. 心理臨床に関わる心の問題の中核としてのパーソナリティの「歪み」の問題。例えば、「登校拒否」、「学級崩壊」などに関わる児童・生徒の心理構造の変化についての測定。及び、その測定に関わって投影法的パーソナリティ検査の作成と検討についての問題。

これらの4つの問題はパーソナリティについての基本的なものであり、もちろん他の問題も数多く指摘しなければならないだろうが、現在のパーソナリティ研究はこれらの問題がその基底にあって、これらの1つ1つが単独に、あるいは複雑に絡み合って、見え隠れして様々な問題を形成しているようである。

上述した理由からいえば、パーソナリティの問題は歴史的に長く問われ続けられてきたものであり、パーソナリティ研究の、例えば今年の新しい動向とかというキャッチフレーズで展望をおこなうというようなことは困難な課題である。そして、また、もう1つの問題がある。それは、パーソナリティ研究の領域がさらに従来の領域を越えて広がりを見せているということである。もとより、「発達領域」にもパーソナリティの問題は関わるし、「教授・学習」や「社会心理」の領域にも関わる。「臨床心理」は、またとりわけパーソナリティ研究の宝庫である。このように、パーソナリティの問題は、実に様々な領域に関わった問題である。そういう意味では、パーソナリティの問題の研究領域は、心理学研究の「坩堝」ともいえる。それにもう1つ述べれば、パーソナリティ研究の特徴、あるいは、それは他の多くの教育心理学的研究の特徴といってもよいのであろうが、この領域の研究は、時間をかけておこなわれるものであって、去年と今年という僅か2年間の期間には大きな相違点はないのではないとも思われる。短い時間のスパンの中でのとりわけ顕著なものがあれば、それこそそれが「目玉研究」というわけなのであるが。

もちろん、これまでのこの年報の展望がそうであったように、学会発表などを検討することによって、ある程

度のこの部門の動向は指摘することはできる。したがって、ここでは学会の諸発表を軸にして、学会誌も入れて検討しながら、この部門の動向を示すこととする。なお、著書については組織的な検索はしていないし、また、紀要類はそれこそ数多いために割愛することとした。このため、残念なことに、数多くの優れた研究が抜け落ちたかもしれないと思われる。そして、このことも残念なことであるが、学会発表についても、ここでの限られた紙面上すべてを示すことはできないという制約がある。

そこで、まず最初、北海道教育大学函館校で開催された日本教育心理学会第40回総会の発表を中心に、それに日本心理学会第62回大会の発表を加えて、学会発表からのこの1年間のパーソナリティ研究の動向について述べる。

学会発表でのパーソナリティ研究

1 日本教育心理学会第40回総会 (1998年度) 発表について

北海道教育大学函館校で開催された日本教育心理学会第40回総会では、人格部門で計4セッション、総計29の発表があった。昨年の広島大学では54の発表があったので、おおよそ半分ぐらいの数であった。開催された時期的なこと（今回が7月におこなわれたこと）と地理的なこともあるいは若干関わったのかもしれない。

今年の学会発表を検討してみる。

「人格A」は「自己」に関するテーマを中心としたセッションである。

溝上・水間（人格A-1と2）「社会一個人基準を考慮した自己評価タイプにおける規定要因の特徴研究—法則定立的方法に個性記述的観点を導入したアプローチの(1)と(2)」は、①自己評価センテンス“私は全体的には自分自身に満足しています”を与えて、‘はい／そう思います’‘いいえ／そうは思いません’の強制二者択一、②WHY答法で、なぜ‘はい’または‘いいえ’と答えたのかを、5個の‘それはなぜですか’に自由回答させる。③溝上による自由評価尺度28項目について5件法で回答させている。結果については、‘はい’群と‘いいえ’群について自己評価のタイプを設定して、自己評価と規定要因との関係を個性記述的観点から検討している。石水（人格A-3）「個人的目標における現実適合度と自己評価の関連—現在の自己投入の水準による差異」は、打ち込むものや傾倒すべき価値観を確立している者（確立高群）は、現実—理想差異と自己評価との関連が弱いことを述べて、その理由として、確立高群の者はより具体的な目標を既に確立しているために、自己評価の際に「優しい人」等の抽象的な目標よりも、より具体的で状況によって行為が特定化されるような目標を重視し、その現実状態との乖離の

方が問題となりやすいと考える。ここでは、そのため、具体的目標と現実状態との乖離と自己評価との関連の強さが、打ち込むものや傾倒する価値観の確立度によって異なるのかどうか検討した。そして、結果として、現在の自己投入のレベルの高いものは、非状況特殊的目標における現実適合度と自己評価との関連よりも、具体的・領域特殊な目標における現実適合度と自己評価との関連の方が強い、と結論づけている。高井（人格A-4）「自己の存在価値意識」に関する研究—中年期の自由記述分析を通して—は、自己の存在価値を人はどのように捉えているかについて、中年期の男女に自由記述させて調べている。存在価値の要因として、「役割」、「役立つ」、「必要とされる」など、その他「有能感」、「信仰」などもある。平石（人格A-5）「自己評価にみる創造性と自己実現の因子構造」は、Maslowの記述、創造性と自己実現とは多くの概念的な重複がある、を検証することを目的として、調査をおこなったものである。つまり、調査によって、創造性と自己実現の因子構造に何らかの共通性が認められ得るかの検討をおこなっている。164項目の自己実現の質問項目について因子分析をおこなった結果、「神経症傾向」、「現実認識」、「調和性」、「解放性」、「自己希求」が得られた。この5因子の因子スコアを予測変数、自己実現についての自己評価値(SA値)及び創造性についての自己評価値(CT値)を目的変数として、それぞれステップワイズ方式の重回帰分析をおこなった。結果をまとめると、SA値は自己希求性因子を除くほかの4因子が、また、CT値については全5因子が有効な予測変数となりうることがわかった。また、SA値とCT値の間には正の相関がみられた。これらの結果から、自己実現と創造性との間には、ある程度共通する因子が存在することが示唆される、と結論づけている。高木・馬場・佐久間（人格A-6）「self-esteemの2側面および愛してくれる人による影響」は「自己の存在価値に基づくself-esteem」と「自己の諸側面の評価に基づくself-esteem」の二種類のself-esteemを確認して、「自己の存在価値に基づくself-esteem」が「自己受容」と関わっているか、また家族や恋人などから受け取る愛情とも関わっているかを検討した。まず、self-esteem尺度を構成した。その結果、「ネガティブなself-esteem」尺度、「自己の存在価値に基づくself-esteem」尺度、「自己の諸側面に基づくself-esteem」尺度の3因子が同定された。「ネガティブなself-esteem」尺度と「自己の諸側面の評価に基づくself-esteem」尺度の影響を除いた「自己の存在価値に基づくself-esteem」尺度と自己受容測定尺度との偏相関係数は、男子では有意ではなかったが、女子では有意であった。ありのままの自分を愛してくれる人の有無と「自己の存在価値に基

づく self-esteem」尺度得点の有意な差は男子ではみられなかったが、女子ではみられた。愛してくれる人のいない群は、親、恋人、友人から愛されている群よりも「自己の存在価値に基づく self-esteem」尺度得点が有意に低かった。高橋（人格A-7）「青年のナルシズムに関する研究—ナルシズムの2つの側面を測定する尺度の作成は、Gabbard (1989) の研究、つまり、放漫で周囲のことを気にかけないタイプと、周囲のことを過剰に気にし敏感で傷つきやすいタイプにわたる研究に基づいて、青年のナルシズムの両側面を測定する尺度の作成をおこなったものである。「周囲のことを気にかけないタイプ」を測定する項目15項目と、「周囲を気にするタイプ」に関わる項目13項目の質問紙を作成し、因子分析をおこなった。因子分析の結果、2つの因子が同定でき、また、「自己愛人格目録」(NPI)、それに特性不安尺度を使って妥当性も検討した。その結果、第1因子とは特性不安尺度と、第2因子はNPIと優位な相関関係がみられ、妥当性がみられたことも報告している。小塩（人格A-8）「青年の自己愛傾向と友人関係—高校生を対象として」は、自己愛傾向の高い人の友人関係を、「自己愛性格尺度」、「友人関係の変化調査票」、「友人にどのようにつきあって欲しいかを尋ねる調査」、「被験者の属するクラスで、好かれている人、信頼されている人、友達が多そうな人をそれぞれ2名ずつ書かせるゲス・フー・テスト」をおこなって調べた。その結果、自己愛傾向の高さを測る尺度として「注目・賞賛欲求」、「優越感・有能感」、「自己主張性」の3因子を同定できたこと、そして、自己愛傾向の高い者は、親しい友人や所属する集団の獲得に成功し、仲間集団にうまくとけ込んでいると自己認知していること、また、そのような者は、好かれていて友人也多そうだと友達から認知されていること、など他者からは肯定的に見られている。しかし、自己愛傾向の高い者は、級友からの信頼を得ているわけではなく、より信頼され、高く評価されたい、という願望が強い、ということを示している。

「人格B」は、パーソナリティ測定に関するセッションである。

山口・黒沢・久野（人格B-1）「自己生成課題による性格特性記述の分析(1)と(2)」は、日本語の性格特性言語をどう考えるべきかを、被験者の側の自己生成課題、及び自然言語システムの観点から検討をおこなったものである。日本語の性格特性言語として有用なものはどれかについての分析である。秦（人格B-2）「フラストレーション場面における敵意、怒り、言語反応の関係」は、対人的なフラストレーション場面で、フラストレーションの原因に関わる人が敵意を抱いていると認知した場合に、

怒りを伴った攻撃的な反応が生じやすい。そこで、「P-Fスタディ」を用いて、frustraterの怒り及び言語反応の関係を明らかにすることを目的としたものである。結果は、敵意を強く感じる人が、強い怒りを感じるかどうかについて、P-Fスタディからは敵意と怒りの関連について、一定の傾向はみいだせなかった、と報告している。曾我・森田（人格B-4）「小学生用5因子性格検査（FFPC）の標準化」は、題名どおり、小学生用の5因子性格検査（FFPC；Five Factor Personality Inventory for Children）の最終版についての、項目分析、妥当性、信頼性の検討についての報告である。板津（人格B-5）「再検査法による自己受容尺度（SASSV）の信頼性の検討」は、自己受容尺度（SASSV）を約4ヶ月の間隔をおいて同一被験者におこなって、2回の検査結果でどのような差が生じているかを調べたものである。結果として、2回の検査間では、差が少なく、きわめて安定していることを報告している。酒井・神田（人格B-6）「感情理解知能の測定の試み」は、エモーション・インテリジェンス（EI）の根幹は、「感情の自己認識」であると考え、Golemanの考えに基づいて、「感情の自己認識」力を「感情理解知能」として、その測定を試みたものである。具体的には、(1)好きな人を思い浮かべてもらい、その人がどんな感じの人か、その人を表現するのにピッタリな言葉を記述してもらい、これを「他者理解テスト」とし、(2)その好きな人に対する気持ちにピッタリな言葉を次に記述してもらい、これを「自己感情テスト」とした。感情理解知能は、自己感情テストにより測定されて、概念的に関連のある共感的関心得点と有意な相関関係があるということの検証をおこなっている。関（人格B-7）「アルファベット筆跡による筆跡個性の検討」は、日本に滞在する11カ国の人たちにアルファベット文字を書いてもらって、共通の文字を使用する者同士には、共通の筆跡特徴があらわれる、ということを検証しようとしたものである。分析の結果、日本、中国、韓国の筆者は同じグループに属することが認められた。桑代・国吉・郷間（人格B-8）「登校拒否経験者のバウムテストについての研究—(2)樹幹の形成段階について」は、登校拒否経験者と、コントロール群として会社の新入社員についてバウムテストを描かせて比較検討したものである。具体的には、樹幹の未形成、形成不全の出現、樹幹と幹との関連、及び樹幹内の分枝の有無、などについて分析をおこない、登校拒否経験者には、樹幹の未形成、形成不全の出現率が高く、また、樹幹と幹との関連も曖昧な例が多かったこと、などを報告している。

「人格C」は、パーソナリティ形成及び変化に関するセッションである。

谷口（人格C-1）「小学生における人格の『望ましき』

の変化」は、子どもたちが人格のどのような特性を望ましいと考えているかについて、1981年のデータと今回のデータとを比較したものである。児童用 Self-Differential Scale を使って21の修飾語、正直な、明るい、陽気な、責任感のある、元気な、などについての変化を調べている。結果として、選択率の変化を検討すると、男子で、明るい、正直な、などが増加、しっかりした、あたまのよい、まじめな、などが減少し、女子では、元気な、正直な、などが増加し、健康な、しっかりした、などが減少している。ありがたい自分像の変化や、性差の縮小が示唆される。芳賀・芳賀（人格C-2）「授業場面における児童の放心の親側要因(3)」は、「両親間の不仲がこどもの授業中に於ける‘情緒障害性の放心’の原因となって、両親間の不仲の改善がこどもの‘情緒障害性の放心’の改善をもたらす」という仮説の検証を1事例をもって検証しようとしたものである。父親の解雇から家庭経済が悪化して、夫婦仲が冷却した。Y児の授業中の放心は両親の不仲が原因と考えて、夫婦仲の改善を目的に両親に対してカウンセリングをおこなった。両親の不仲の度合いが改善されていくにつれて、児童の放心は少なくなった。石田（人格C-3）「親の内発的養育態度と児童の内発的学習意欲が児童の共感と正義の倫理に及ぼす効果」は、児童における共感と正義の倫理の涵養が、児童に対する親の応答的、内発的養育に立脚した家庭教育と児童の内発的学習意欲の所産であることを示唆したものである。さらに、本研究では、人々や社会、自然に関する真の内発的学習は、事象間の法則性の認識に加えて、人間に対する同感（共感）を内発的に動機づけていく。自律的自我のこのあたたかい体温が倫理的品性の本質であるといえる。そして、いまひとつの、人間の「正義」の品性の涵養も、児童期後期の早期完了課題ではないことを実証したもの、と述べる。この質問調査に基づく研究は、重回帰分析ダイアグラムの展開もおこなっており、結論については了解できる。遠山（人格C-4）「小学生の親子関係が親の期待と子どもの目標の関性に及ぼす影響」は、小学生に対して親は期待を持つ。そして、小学生は、親の期待を自らの目標として内面化する。この親の期待に対して小学生が応えるかどうかを決定する際に影響する要因として親子関係が考えられる。また、期待の内面化によって、子どもの目標は親の期待と類似したものとなる。この理論に基づいて親子関係の関係性の良し悪しによって被験者を2群に分けて、小学生の認知している親の期待と子どもの目標の類似性が群によってどのように異なるかを検討したものである。結果の1つの方向として、親との関係性が良くない方が、親の期待に応えるような目標を持つ傾向を示す内容が多かった。西田（人格C-5）「母親

の充実感と中学生の生活感情の関連について—中年期の母親と青年前期の子ども双方の視点から—」は、中年期にある母親が生活に虚無感を感じたり、取り残されているといった寂しさや不信感を抱くことは、子どもの否定的な生活感情と関連し、逆に生き生きとした生活気分、家族や周囲との連帯意識、基本的信頼感情や将来に対する時間的展望などの積極的な感情を抱くことは、子どもの肯定的な生活感情と関連することを、「母親—充実感尺度」と「子ども—生活感情尺度」で調べたものである。田中（人格C-6）「親子関係と自我同一性の関連に及ぼす素質的要因の影響」は、個体の素質的要因が環境要因としての親子関係と自我同一性にどのような相違を生じさせるかについて、父子関係で調べたものである。MPIを中心にして調べた結果、内向性のものは、自我同一性が、外向性のものと比較して、親子関係との相関が高かった。また、神経症傾向なし群も、自我同一性との相関が高かった。このことは、素質要因が親子関係と自我同一性との関連に影響していることを示唆するものと結論づけている。稲本（人格C-7）「青年期女子の性同一性と対社会的過敏性」は、結果として、女性が自分の性に対して否定的であることと、対社会的過敏性の高さとの関係が認められることを指摘した。この対社会的過敏性が高いというのは、1つの防衛の形として機能しているのであって、他者との心理的な距離をとることで、自我が直接脅かされるのを防いでいるのだと結論づけている。藤井（人格C-8）「中学生における自己意識とエゴグラム」は、中学生1,748名について、「中学生用自己意識尺度」と「エゴグラム」を用いて、自己意識特性と自我との関連を調べたものである。ACが私的、公的自己意識、および社会的不安特性と強い関係があったことなどを述べ、青年期前期において自己意識の高まりは大切なのであるが、自己否定的な自我状態の人が青年期に入り、自己意識がたかまると、社会的不安傾向も一緒に顕現化される、と示唆している。

「人格D」は、無気力感、幸福感、学習意欲、などの構造に関わったセッションである。

奥田（人格D-1）「無気力感についての因子分析的研究—大学生を対象として—」は、無気力感を測定する尺度を用いて、因子分析により「無気力感」の規定因を検討したものである。因子分析の結果、「自己認知・将来展望」、「対人関係」、「生活認知」、それに「生活疲労」の4因子が抽出された。嶋名（人格D-2）「現代大学生の幸福感と幸福度—「人生のやり直し」という観点と関連づけて—」は、「これまでの人生でもっとも幸福だったのはいつか」と「人生をやり直せるとしたらいつからやり直したいか」という質問に基づいて幸福度の肯定を調べたものである。

分析から、積極的・肯定的理由と分類された被験者は、現在の幸福度が高かったことが示された。鹿毛（人格D-3）「学習意欲の構造とその統合的発達(2)」は、教職課程に登録して、「教育心理学」を履修中の大学生と大学院生に、「教職志望動機項目」40項目と「学習行動項目」10項目をおこない、①項目分析、②教職志望程度と教職志望動機、学習行動の関連、③動機構造のパターン分析、などをおこなった。その結果、項目分析からは、学習、情報収集、体験の因子を抽出した。そして、また、教職志望が高いものほど、学習行動、情報収集の得点が高いことがわかった。また、各因子間のパス解析の結果、知的好奇心、認識の深化、関係といった動機が教職志望の程度に影響し、学習や情報収集行動を促進する可能性を示唆している。今林（人格D-4）「教育実習生の時間的展望に及ぼす職業決定の状態」は、教育実習生の職業決定の状態を、「回避」、「模索」、それに「決定」群にわけ、教育実習の効果を調べた。その結果、開始前「回避」の状態にあったものが、「模索」や「決定」の状態に変化するものもあり、また、将来の職業人としてのイメージを意欲的に考えようとする姿勢も現れた、ことを報告している。伊谷・杉村・藤田（人格D-5）「教育大学生がもつ生徒指導のイメージ」は、大学の授業「生徒指導」のイメージを授業の開始日にSD法で測定したものである。「厳しい」「古い」「細かい」「大変な」「暗い」「気持ち悪い」「強制的な」「難しい」「辛い」「かたい」「やかましい」「つらい」「激しい」という反応傾向がみられた。

以上、これらの教育心理学会での研究報告からは、自己の問題、パーソナリティの形成・発達に関わる問題、パーソナリティ特性の同定、学習意欲、などに関わる問題が示されている。

2 日本心理学会第62回大会（1998年度）発表について

東京学芸大学で開催された日本心理学会第62回大会では、37の発表があった。昨年の大会では、51の発表であったのでここでも減少している。発表を検討すると、教育心理学会のものと大きな相違はないが、「自己評価」、「創造性と自己実現」、「青年の自己愛とナルシシズム」、「児童の発達」などに関わったものや、「パーソナリティ検査」に関わったものが多い。

人格1は、対人関係・人見知り、ヨーガなど人格形成・変容に関わったセクションである。

高橋・飯田及び飯田・高橋（人格1-1と2）「高齢者の生活史にみる対人関係の変容(1)―対人関係の変容をみるための生活史の分析の枠組み」と「高齢者の生活史にみる対人関係の変容(2)―対人関係の枠組みからみた生活史」は、65歳以上の人たちの対人関係について、「対人関

係が豊かでないとする Lone wolf 型 (Lw 型) と配偶者を中心とした対人関係を報告する配偶者型 Spouse 型 (S 型) とで、対人関係についての生活史の内容の差異を明らかにしようとしたものである。これらの両者は質的に異なる対人関係を有しており、それは生活史の解釈にも反映されて、S 型はポジティブな生活史の側面に、そして、Lw 型はネガティブな側面に焦点化している、と結論づけている。秋山（人格1-3）「成人女性（母親）の実父母との似より感について―女子学生を持つ母親の性格認知」については、「似より感」が、青年期における同一性の確立・拡散という課題とどのような関係をもち、どのように取り込まれているのか、について検討したものである。芳賀・芳賀（人格1-4）「子供の人見知りの親側要因(4)」は、「親が自分の幼児・児童を他人から触れられるのを嫌う態度は、その子供の人見知りの一形成要因となり、親の当該態度の改善は、子供の人見知りの改善をもたらす」という仮説の検証を児童Nについてケース報告をおこなったものである。結論として、親の我が子を他人が触るのをきらう傾向と、子どもの人見知り傾向は、親の自我防衛と子どもの自我防衛の関連性である、と結論づけている。野坂（人格1-5）「母と子のヨーガ―母親と幼児による行法が心身に及ぼす影響(2)」は、母親と幼児におけるヨーガ行法の影響について調べたものである。そして、母親と幼児一緒にヨーガ行法は、幼児にとってスキップの場であり、楽しくおこなっていること、プログラムに聖典読誦として「本の読み聞かせ」を導入すると、本への興味づけの機会ともなっていること、また、運動能力の向上や健康面での効果もあったこと、複数でおこなうことで、友人との交流をたのしんだり、また、集団になれるという場の影響もあったこと、などを報告している。藤田（人格1-6）「P-F スタディに現れた不明確語の研究VI―特に、青年期「なんで」反応の出現可能性と解釈について」は、P-F スタディの右側人物の吹き出し部分にあらかじめ「なんで」と印字してある図を使用して、「なんで」という言葉を通して本当にいいかかったことは何か、について調べたものである。佐々木（人格1-7）「ハンドテストのカードブルに関する基礎的研究―ハンドテスト図版の印象評定と不安傾向との関連から―」は、ハンドテストの各図版の反応特徴基礎資料として各図版の印象をSDを使用して検討したものである。

人格2は、自己の構造、自我同一性、自己愛などに関わったセクションである。

稲松（人格2-1）「自己の構造（試論その4）―ロゴセラピーからの考察」は、自己の構造について、ロゴセラピーの観点から考察を加えた発表である。石井と越川（人格2-2）「青年期女子の自我同一性の発達について」は、①

基本的信頼—親密性の各課題を総合して「自我同一性」を捉えた場合、それが青年期にどの様に達成されていくのか。②青年期において各領域はどの様に達成されていくのか。③「女性の自我同一性の発達は第IV段階が第V段階に平行または先行する」という仮説は支持されるか、について検討している。その他このセクションでは、児玉（人格2-3）「青年期女子の自我同一性に関する研究—ロールシャッハ法による検討—」、高井（人格2-4）「「自分に対する自信」に関する研究—青年期・成人前期の自由記述分析を通して—」、安心感の働きを自我機能の視点から捉えることを目的にしておこなった平岩（人格2-5）「安心感と自我機能の関わりについて」、田中（人格2-6）「自己受容に関する研究—時間の及ぼす影響と精神健康度・他者受容度との関連性」、陶山・須永（人格2-7）「自己愛人格傾向と不適応」がある。

人格3は、パーソナリティ検査の作成など関わったセクションである。

福原・肥田野・岩脇・曾我・伊田・岩田及び肥田野・福原・岩脇・曾我・伊田・岩田（人格3-1と2）「日本版 STAI-Y の標準化(1)—標準化の過程と尺度」と「日本版 STAI-Y の標準化(2)—項目特性、信頼性、妥当性—」は、①不安の概念をより明確化する。特に、鬱傾向と不安傾向の分離、②特定の個人や集団によって不明確な項目を極力さける、③不安の存在項目と不在項目の比率を測定上意味あるものとする、などの配慮をして作成した状態不安項目と特性不安項目それぞれ20項目を元にして、類似の項目をさらに追加し、そして、さらに文化的配慮などもおこない、S-Anxiety に関わる項目34、S-Anxiety に関わる項目36を作成した。その結果、男女別平均値とSDを算出し、10項目で男女差があった。因子分析の結果、特性不安ともに男女とも第1因子と第2因子がうまく分離した。日本の項目は因子には入らなかった。第2報は項目特性を明らかにして、尺度としての信頼性と妥当性を、再テスト法などにより検討したものである。村上・村上（人格3-3）「主要5因子性格検査の全国標準化—中間報告—」は「主要5因子性格検査」の標準化の報告である。外向性、協調性、勤勉性、情緒安定性、知性の5因子からなり、各12項目からなる。本報告では、1,166名についてなされ、男女差と世代差があったことが報告されている。本セクションでは、その他、柏木（人格3-4）「マークシート加算テスト FFM-ADD-TST2 の標準化」、藤島（人格3-5）「特性論5因子モデルによる中年管理者の性格プロフィール」、和田（人格3-6）「炎症性腸疾患患者における Big Five と QOL の関連性について」、などが報告されている。

人格4は、MMPIに関わったセクションである。

高見堂・新開・小口・早馬「女子大学生集団における MMPI-2分布形態」、新開・小口・野村・松田「MMPI-1とMMPI-2の因子構造比較」、鋤柄「項目反応理論に基づく適応形MMPIの実データによるシミュレーション」、村上・村上「MMPI-1, MINI, MINI-124の解釈サービス版について」、森「問題解決中の行動とMMPI性格尺度の関連」、小林・塩谷「精神科長期入院患者を用いたMMPI新日本版の信頼性の検討：追加尺度について」は、MMPIの因子構造、診断システムの開発、等に関わるものである。

人格5は、「自己」に関わるセクションである。

若林（人格5-1）「自己モニタリング・自己意識とパーソナリティ—自己モニタリングと自己意識からみたパーソナリティ傾向とスキルとしての‘心の理論’能力—」は、自己モニタリングと自己意識とパーソナリティとの関係を調べたものである。尾崎・溝上（人格5-2）「自己評価の規定要因における表現形態の検討(I)—ApproachとAvoidance—」、溝上・尾崎（人格5-3）「自己評価の規定要因における表現形態の検討(II)—ApproachとAvoidance—」、水間（人格5-4）「社会—個人基準を考慮した自己評価タイプと規定要因表出過程の関係—規定要因表出の難易度と規定要因の有効性評価の観点から—」は、すでに(1)の教育心理学会の発表の所で述べたのと同じラインにある発表である。酒井・山口（人格5-5）「価値志向性尺度による得点と他者に与える印象」は、Sprangerの価値類型論に基づいて作成した価値指向性検査（これは、自己評価である）と、その人をよく知っている他者からの評価が、どの程度一致しているか、を調べたものである。自己評価と他者評価は、1つの類型を除いて一定の対応関係がみられた、と報告している。浮谷・大村（人格5-6）「Emotional Intelligence (EI/EQ) についての研究」は、内山喜久雄試案に基づくEQテストをおこない、スマートさ、自己洞察、主体的決断、自己動機づけ、楽観性、自己コントロール、愛他心、共感的理解、社会的スキル、社会的デフテネスの計10尺度の得点を男女別に算出している。そして、得点に男女差がなかったことを報告している。

人格6は、「Type A」やストレス、心配などに関わるセクションである。

高橋・佐藤及び佐藤・高橋（人格6-1と2）「Type A行動パターンの検討(XVI)—感情体験および家族・対人関係の観点から—」「Type A行動パターンの検討(XVII)—基準作業量設定下での心臓血管系反応—」は、Type A特有の感情体験を調査して、Type Aの情動ストレスを明らかにする目的で、Type Aの自己および他者概念、また対人関係、家族関係を調査したものである。さらに、

Type A は生来の性格というより何らかの社会的、精神的報酬を受けることにより獲得されていく行動様式であることから、形式の生育歴的背景をさぐっている。野澤・岡林（人格6-3）「女子看護学生のストレスの感じ方が self-esteem に及ぼす影響—irrational belief の観点から」は、ストレスの感じ方とセルフ・エステームとの関係について、杉浦・丹野（人格6-4）「不安認知の問題解決的側面と制御困難性の関連」は、問題解決場面と性格特性、心配への対処などの関連を調べたものである。名倉・橋本（人格6-5）「Rumination 効果に関する実験的検討—否定的気分の持続に及ぼす影響について」は、ストレスのコーピングについて「Rumination 型対処」と「Distraction 型対処」があることを示唆している。「Rumination 型対処」は抑鬱を長引かせやすく、「Distraction 型対処」は抑鬱を軽減させやすい。結局、前者は抑鬱気分によって自己評価や帰着スタイルがネガティブになり、それがさらに抑鬱を生じさせること、問題解決型行動が阻害されることなどが先行研究で示唆されているが、これらについてさらに研究の進展が望まれる。本研究は示唆に富んだ研究である。益谷（人格6-6）「敵意に関する罪感情の測定」は、Moshier の質問紙から「敵意」に関する84項目、そしてさらに「身体的攻撃性」10項目、「言葉による攻撃性尺度」13項目、「攻撃衝動性尺度」11項目の計114項目、それに「文章完成法テスト」として12項目の2種類の検査をおこなって調べたものである。

3 学会誌にみるパーソナリティ研究—「教育心理学研究」を中心にして

1997年度7月から1998年度6月までの「教育心理学研究」に掲載された論文を中心としてパーソナリティ関係の研究を概観したところ、特性尺度構成に関する研究、幼児期・児童青年期・老人期の自己に関連した研究、性役割などに関係したものをあげることができる。

高村(第45巻, 第3号)「課題研究時におけるアイデンティティの変容プロセスについて」は、課題を探究する際にどのようにアイデンティティが変容するかを検討するために、縦断面接によって集められたケースを、Grotevant のアイデンティティ形成のプロセスのモデルに照合することを試みたものである。その結果、22ケース中11ケースが Grotevant のモデルに沿ったプロセスを示した。しかし、Grotevant のモデルでは、アイデンティティが形成されていくプロセスのみを示しており、そのモデルに従わない場合については示されていない。アイデンティティ変容のプロセスを明らかにしていく場合、Grotevant のモデルのような、アイデンティティ形成が順調に行われたものにのみ焦点を当てるのではなく、そ

うでない場合についても取り入れていくことが必要であろう。そこで本研究では、進路選択という課題探究において、Grotevant のモデルに従わなかったケースについて、課題探究やアイデンティティ探究にどのような特徴がみられるのかについての検討を試みている。谷(第45巻, 第3号)「青年期における自我同一性と対人恐怖的心性」では、「個」—「関係」の葛藤を伴う日本における「アイデンティティ危機」は、親密性の問題とも関わる「対人恐怖的心性」に影響を与えており、また、その両者に対して「個」—「関係」の対置の中で発揮される側面を持つ「自律性」の感覚が影響を及ぼしているということを共分散構造分析を用いて検討したものである。その結果、測定方程式においても構造方程式においても、因果係数がすべて有意であったことから、それらの関係性は、すべて支持されたといえる。また、モデル全体の適合性も十分な値を示し、構成されたモデルは全体として説明力が高いものであったといえる。さらに、内生的潜在変数の決定係数も高く、因果関係の規定力も高いモデルであった、としている。富安(第45巻, 第3号)「大学生における進路決定自己効力と時間的展望との関連」は、進路決定自己効力尺度の全体得点ならびに下位尺度得点と Circles Test の3指標の得点ならびに未来イメージ尺度の得点との関連についてを中心にしておこなわれたものである。進路決定自己効力尺度の全体得点は、Circles Test の3指標すべてと有意に関連していた。時間的優越性に関しては、全体得点は未来優越群、現在優越群、過去優越群の順で高く、未来優越群は現在優越群と過去優越群よりも有意に高かった。時間的展望が過去から現在、現在から未来へと展開しているほど、進路決定自己効力は高いといえる。時間的関連性に関しては、統合群が連続群よりも進路決定自己効力尺度の全体得点は有意に高かった。時間的展望において、過去、現在、未来が統合されているほど、進路決定自己効力は高いといえる、としている。沢宮・田上(第45巻, 第3号)「楽観的帰属様式尺度の作成」は、Seligman (1991) により作成された楽観的帰属様式尺度の原項目を翻訳しただけの尺度はきわめて信頼性の低いことが、予備的検討を通して明らかになった。信頼性を低める要因と考えられる不適切な項目を削除し、さらに日本の文化的背景を考慮して項目を追加することで、楽観的帰属様式尺度を作成し、調査1において、その因子構造を確認するとともに、内的一貫性を検討した。さらに、調査2においては、再検査法による信頼性と、Y-G 性格検査との相関をとって妥当性を検討した。その結果、本楽観的帰属様式尺度には、実用に耐え得る信頼性と妥当性のあることが明らかになった、としている。菅沼(第45巻, 第4号)「老年期の自己開示と

自尊感情」は、これまでの自己開示研究では殆ど対象とされて来なかった老年期を取り上げることによって、開示者と開示対象との関係が親密なほど開示量が多いとする従来の知見が、老年期においても支持されたことを報告している。同時に、老人にとっては、過去の人生経験や現在の肯定的な日常の事柄よりも、喪失経験に基づく現在抱えている悩みの方が開示しにくい内面性の高い事柄である、ことを示唆している。更に、自尊感情との関連性から、第1に自尊感情が中程度の老人は開示量が全体的に多く、自尊感情の高い老人は、過去の経験や肯定的な事柄を親密な他者に多く示して更なる自尊感情の向上を図る一方で、内面性の高い喪失経験に基づく悩みを親密度の低い他者に開示しないことにより、評価低減を回避して自尊感情を保持する傾向も見られたこと、なども報告している。松尾・新井（第46巻、第1号）「児童の対人不安傾向と公的自己意識、対人的自己効力感との関係」は、「公的自己意識の高さと、対人的自己効力感の低さを合わせ持つ者が、もっとも強い対人不安傾向を有する」という仮説について検討したものである。対人的自己効力感が低いことは、対人不安傾向の高さと関連があると考えられる。公的自己意識が高く、対人的自己効力感が低い、つまり、他者からの目が気になり、自分の社会的行動の遂行に自信の持てない子どもが、もっとも強い対人不安傾向を示す、とする。水間（第46巻、第2号）「理想自己と自己評価及び自己形成意識の関連について」は、理想自己について、その2側面—自己評価の内的基準、自己形成を導く指針—に沿って検討している。そこで、理想自己と現実自己のズレと自己評価との関連、及び理想自己の水準と自己形成意識（可能性追求因子と努力主義因子とからなる）との関連を検討している。研究に際しては、理想自己に関して、上記の目的を実証するに意義のあるものとそうでないものとを区別しよう心がけた。また理想自己の水準の高低で群分けをおこない、可能性追求得点と努力主義得点の平均値についてt検定をおこなったところ、可能性追求得点について5%水準で有意に高群の方が高い得点を示した。ここから、理想自己の水準の高さは自己評価の低下と関連しながらも、一方で、個人の自己形成に向かっていきたいという意識の高さのあらわれともみなしうるのではないかと示唆している。

ま と め

パーソナリティ研究の動向

本年度の日本教育心理学会第40回総会と日本心理学会第62回大会の発表論文集を概観すると、「パーソナリティ特性の測定」、「無気力感について」、「学校ストレスの影響」、「自己の諸側面について」、「青年心理学について」、

などに関わる研究が目立つ。そして、このことは特に今年の特徴というわけではなく、昨年の論文集を検討してもだいたい同じ傾向がある。各研究者の研究テーマは、自分の専門性のために、連続性を持ち、かつ継時的な性格を持っているから、当然といえば当然な傾向であろう。そして、「学会発表」はいわば個々の研究者の1年間の集大成といった性格を有している。これら2つの学会を比較すると、教育や発達に関わるパーソナリティ研究の多いのが教育心理学会であり、「パーソナリティ検査」、「特性論」などが多いのが、日本心理学会の特徴といえるだろう。ただ、これらの学会に共通した問題点を指摘するとすれば、1つにはこれらの研究での「被験者」の問題がある。少なくない研究が、被験者として短大生や、大学生を使っている、それを日本人の代表データとして扱っている。さらに、「学習意欲」や「発達」を扱った研究でも、短大生や大学生を被験者として使っている。小・中・高校生のデータを集めることが学校の事情などもあって難しい時代であることは事実であるが、「学習意欲」とか「発達」を変数にした研究では、そのテーマが子どもたちの問題に関わるものであるだけに、小・中・高校生のデータを取って調べるのが本筋であると考え。

ところで、最近では、児童の精神発達、あるいはパーソナリティの発達に関わって、学校現場での「学級の崩壊」の問題も大切な研究事項である。教師—生徒関係とか、子ども—子ども関係はこうあるべきだ、という従来の考えが成り立たないことへのメスを入れるにあたって、児童について、学級について、家庭について、をもう一度捉え直せば、興味ある事実が出てくるかもしれない。それは単にパーソナリティだけの問題ではなく、心理学の複数の領域にまたがる問題でもある。

人格の基本構造の問題

この稿の最初に述べたように、パーソナリティの構造について、「Giant Three」(巨大3次元尺度)か、「Big Five」(5大次元尺度)か、の論議が盛んになされている。つまり、パーソナリティという傘の骨をささえる次元は何か、そして、それはいくつ必要なのかについての論議である。パーソナリティの次元、つまり、説明に耐えうる次元はいくつでよいのか、ということは常に研究者の関心の的であった。最近の研究の1つでは、基本的に、いわゆる、トレイト理論に根ざす5因子理論に還元できるとする。日本心理学会でのシンポジウム「性格特性の到達点と課題」で、柏木は、Big Fiveは統計学的推定の所産というよりは、直交因子回転付きの主因子分析による探索的所産であると述べている。いずれにしても、これについての論議は、もう少し行われる必要があろう。「軸」とか「次

元」を定めることは、パーソナリティ研究領域の重要なテーマであるためである。

そして、もう1つ。1998年11月に、私はアメリカのデラウェア大学 (University of Delaware) で、パーソナリティ研究の第一人者、「Sensation Seeking Scale (SSS)」の作成者として有名な、Zuckerman, M.教授と、パーソナリティ構造について論議した(そこは、私の研究の拠点の大学でもある)。彼は、パーソナリティ構造の次元についての本筋とともに、このことについては、「異文化比較」も加えて、論議を進めるべきことを力説した。グローバルな観点からのパーソナリティ構造についての比較検討は、今後さらに大切なこととなろう。

EQ または、EI についての研究

今、EI または EQ という言葉が関心を集めている。特に、アメリカでは人気がある。この EI または EQ という概念は実証的に存在するのであろうか。Goleman (1995, 1998) では、彼は IQ みたいには簡単に測定はできないものである、と述べている。EQ は情動に関係するが故に、この概念が科学的にはっきりとしたものとして定着するにはなお時間と研究が必要だろう。つまり、この概念は、現時点では IQ みたいなはっきりとした尺度ではない。このような概念は、人のこころの「やさしさ」、とかの概念で説明できるものではないだろうか。とすると、ことさらに新しい概念でもないようである。それに、EQ という言葉でこれを得点化しても、それが、IQ と同じ様な数値の強さを持ってない、と思われる。だから、EI は知能指数ではなく、ソーシャル・スキルの1つ、あるいは、パーソナリティの1つの変数として扱うべきであろう。

パーソナリティ研究のこれからの方向性

パーソナリティ研究は、これからどこへ向かおうとしているのか。数多くの人格心理学史の本をひもといて、これまでおこなわれてきた研究を概観しながら考えることは、数多くの研究が、パーソナリティ構造の単純化の説明をおこなおうと試みてきたことである。パーソナリティは本来的に複雑な構造をしたものであるからには、「可能な限り単純なもの」へという主張は、科学の主張する一面として当然ではある。しかし、この稿の冒頭で述べたように、「Giant Three」(巨大3次元尺度)か、「Big Five」(5大次元尺度)かといったように、パーソナリティを単純な構造に還元可能なのか、どうかといった考えは常に後に残るものである。つまり、「これでいいのだ」といったん確信しつつ、一方では、それでもなお、「これでいいのか」といった不燃焼感が消えないように、複雑な構造を解きほぐすことの困難さを痛感する領域でもある

ことを再認識させられる。今パーソナリティ研究の基盤はどこにあるのか。パーソナリティ構造は、「Giant Three」か、「Big Five」構造で説明が十分できるのか。何を、どのように調べていけば、解き明かしの道筋をはずれないで進めていけるのか、などの思いがつきることではない。

そのような道筋を考えていくにあたって、今、私はパーソナリティ研究は、これまでもそうであったように、「人間性」や「尊厳性」などを意識しつつ、「心」の全体構造を理解していく領域なのだ、という意識をもって進めることが大切な事ではないかと、考えている。ここで私が言う「心」とは、愛、憎、やる気、自己統制、自己効力、無気力、などなどの諸行動に関わる「自己」を中心にしたもののことである。

心理療法の基礎理論としての人格研究からはじまり、脳内のユニット細胞活動を調べる生理学を研究し、青年のカウンセリングをおこないながら青年心理学を研究し、子どもの自己、学習様式、学習意欲、などの諸心理の発達へと繋げて研究してきた私としては、今パーソナリティを「包む」ものとしての「心」の大切さを説く教育心理学の重要性を感じている(塩見他, 1998)。そして、そこで中心となるのは、上述したように、人間を動かす大きな根源的なものとしての、人間の行動の根幹にある「心」のことである。そして、それらを含めて、「Giant Three」や「Big Five」構造を包括的に考えていくことが、パーソナリティ研究なのではないのか、と考えるのである。

引用文献

- Goleman, D. 1995 *Emotional intelligence*. New York : Brockman Books (土屋京子訳 1996 EQ —こころの知能指数 講談社)
- Goleman, D. 1998 *Working with emotional intelligence* New York : Bantam Books.
- 松尾直博・新井邦二郎 1998 児童の対人不安傾向と公的自己意識、対人的自己効力感との関係、教育心理学研究, 46-1, 21-30.
- 水間玲子 1998 理想自己と自己評価及び自己形成意識の関連について 教育心理学研究, 46-2, 131-141.
- Ng, H.-S., Cooper, M., & Chanddler, P. 1998 The Eysenckian personality structure : a 'Giant Three' or 'Big Five' model in Hong Kong ? *Personality and Individual Differences*, 25, 1111-1131.
- 日本教育心理学会発表論文集 1998 第39回日本教育心理学会総会 北海道教育大学函館校
- 日本心理学会発表論文集 1998 第62回日本心理学会総

- 会 東京学芸大学
- 菅沼真樹 1997 老年期の自己開示と自尊感情 教育心理学研究, 45-4, 378-387.
- 塩見邦雄編 1998 心理検査ハンドブック ナカニシヤ出版
- 沢宮容子・田上不二夫 1997 楽観的帰属様式尺度の作成 教育心理学研究, 45-3, 355-362.
- 谷 冬彦 1997 青年期における自我同一性と対人恐怖的心性 教育心理学研究, 45-3, 254-262.
- 高村和代 1997 課題研究時におけるアイデンティティの変容プロセスについて 教育心理学研究, 45-3, 243-253.
- 富安浩樹 1997 大学生における進路決定自己効力と時間的展望との関連 教育心理学研究, 45-3, 329-336.
- Wiggins, J.S. (Ed.) 1996 *The five - factor model of personality* New York : Guilford Press.